

核兵器のパラドックス：より安全で調和のとれた世界を目指して

By Muhammad, Abubakar Hassan

核兵器は地球を守れるのか？

1983年9月、冷戦のさなかに、世界は全面的核戦争の重大な脅威に直面した。ソ連の核早期警戒システムが、米国から発射されたと見られる5発の大陸間弾道ミサイルを探知したのだ。この重大な状況の指揮を執ったのは、指令センターに配置された若いエンジニア、スタニスラフ・ペトロフと彼のチームだった。ペトロフの任務は、このような事案を報告して適切な対応をするべく上層部に迅速に報告することだった。しかし彼はそうしなかった。直感を頼りに、これが誤報かもしれないと判断したのである。彼は勇敢にも立ち上がり、誤っていれば深刻な結果となることを承知の上で、さらなる証拠が出てくるまで待機することを選んだ。時間が経つにつれ、ペトロフの直感が正しかったことがわかった。確かに誤報であることが判明したのだ。彼の慎重な行動によって、米国からの壊滅的な報復攻撃が回避され、世界は壊滅的な核紛争から救われた。この出来事は、第二次世界大戦中の最初で最後の核兵器の使用以来、70年間で起きた「核の危機一髪」の一例である。核大国間の危険なダンスは、地球全体と人類全体を絶滅の危機に晒している。

私たちは、どれだけの期間、完全に抹消される恐れの中で生き続けるのか？

私が核兵器を意識しだしたのは12歳の時だった。Encarta デジタル百科事典を見ていて、広島と長崎についての情報を偶然見つけたのだ。核兵器の巨大な破壊力とこれらの都市に与えた壊滅的な影響について学んだ経験は、私に強い印象を残した。しかし、その16年後に、私自身が長崎の爆心地からほんのわずかの距離の場所に暮らすことになるとは想像だにしなかった。

何ヶ月もの間、長崎に住んでいたが、今年初めになってようやくその出来事の恐ろしさを実感する機会を得た。それは、東京大学が長崎大学の支援を受けて開催した「長崎グローバル・プラクシス」というプログラムに参加したことがきっかけだった。このプログラムは、長崎とグローバルヘルスの歴史的な繋がりを研究するもので、特に原爆について焦点を当てていた。原爆資料館、永井隆記念館、浦上天主堂、原爆後障害医療研究所などへの訪問を通じ、原爆投下はより生々しく現実味を帯びてきた。がれきから回収された建物の破片、溶けたガラスや瓶、そして西森一正博士の血染めの白衣が、遠い時間と空間とに感じられていた出来事を、鮮やかに意識させた。私たちは数少ない被爆者の一人と会い、交流した。これは極めて心を揺さぶられる経験だった。しかし、私の見方に最も大きな影響を与えたのは、永井博士が原爆の体験を綴った「長崎の鐘」という本を読んだことであつた。何日間にもわたって、原爆投下に至るま

でとその後についての博士の回想の一コマコマが私の心に重くのしかかった。私はしばしば爆心地公園に行き、そこで座って考えに耽った。そのような中で、私の心に大きな疑問が浮かび上がってきた。

核兵器そのものが根本的な問題なのか、それとも核兵器とは、人類がより深い問題、すなわち全ての人間に固有の平等性を認識し、互いに共存する能力の欠如を覆い隠すための道具に過ぎないのか？

今日の世界は、地政学的な緊張と存亡の脅威のさらなる増大に直面している。ロシアによるウクライナ侵攻によって、「終末時計」は真夜中まで残り 90 秒に進み、これまでで最も終末に近づいた。核兵器のない未来への必要性はますます大きくなっている。核兵器廃絶が不可欠であることは当然として、私たちはこの闘いの根本原因にも立ち向かわなければならない。それは、私たちに平等な人間として調和をもって共存する能力に欠けているという点である。

無比の壊滅をもたらす能力を有する核兵器は、破壊に向けた人類の力を象徴している。核兵器は存在するだけでも危険で高価な軍拡競争をもたらし、国家間に不信と敵意の種を蒔いている。歴史は核戦争の恐ろしい結果を証明している。

核兵器の存在が、相互確証破壊の原則に基づいて相対的平和を保証するという、広く受け入れられてきた仮定は、その存在を正当化するには不十分である。核兵器はユニークな創造物である。不使用を希望しつつも、各国はそれらの開発を続けており、ますます致命的なものになっている。現在、世界各地には 1 万 2 千発を超える核弾頭が散在しており、そのリスクは看過できない。

より安全な未来への道は、これらの兵器を保有し続けることではなく、全面的な軍縮に向けた共同の努力を行っていくことにある。偶発的発射、技術的故障、攻撃的な指導者の出現の可能性は、こうしたリスクをさらに高めている。真の平和は、外交、協力、そして、平和で核兵器のない世界という共通のビジョンを最重要視することによってのみ達成される。

私たちには、互いを殺戮し合うことなく平和を維持する代替手段が必要である。それを達成できれば、間違いなく私たちの最大の進化上の成功となるだろう。私たちは、核による絶滅の恐怖が立ちのぼることを恐れない未来を確実なものとし、全ての国と人々の生存と繁栄を守るべく、決意を共にしていかなければならない。